NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY | BOOK II — PUDU ALPHA

第 6 章　保管者の沈黙

THE CUSTODIAN'S SILENCE

最初の礼拝への呼びかけが流れ終わるまで、封筒は開かれないままだった。

保管者の建物の中にモスクはなかった。実のところ、道路地図という古い語彙で距離を表せる範囲には、都市と呼べるものさえ存在しなかった。声はアナログ短波の中継を経て届いた。三つの政府と二度の大気改造計画を生き延びた礼拝通信網の、最後の構成要素だった。わずかな、しかし美しい歪みを伴っていた。父親は歪みを劣化の証拠とみなしていた。今の彼には、世界のどこかを、許可も得ずに何かがまだ通り抜けている証拠に思えた。

タイレルという名前が帝国を意味した時代、彼はまだ少年だった。いま省庁は、その残存法人を「未解決産業化石」に分類していた。もはや何も所有していないとは認めないまま、資産目録にだけ載せられる便利な区分である。彼の名はエイドリアン・タイレル。姓の方は、役に立つことより面倒を生むことの方が多くなっていた。父は、所有こそ記憶が存続する唯一の形式だと教えた。それ以来、エイドリアンはその言葉の両半分を疑うようになっていた。

二つの装置は別々の保管庫に収まっていた。かつてソニーのメモリカードを受け入れた小型の民生用リーダーには似ても似つかなかった。ただ、セラミック製の前面中央に細いスロットが開いている点だけは同じだった。左の装置には炭色の封止材の下に傷んだタイレルの紋章が残っている。右には何の印もない。どちらにも Texas Instruments 製の制御ロジックが組み込まれていたが、その製造契約は古すぎて、政府にはもはや動作するエミュレーターが残されていなかった。

それらは現代的な意味でのコンピューターではなかった。「証人」だった。それが最初の法律用語で、技術者たちは「証明治具」と呼ぶ方を好んだ。その区別のために父は数百万単位の通貨と一度の結婚を失い、やがて会社は自らの機械を自由に製造する権利まで奪われた。

作業台には、樹脂製の封筒に包まれた、通電していない Memory Stick PRO Duo MAX が置かれていた。親指より大きくないカードだった。内部記憶領域は、その製造世紀の基準でもありふれたものだ。生き残ったのは防水ハウジング、接点、独自の MagicGate 交換プロトコルだった。奇跡の人工魂など格納されていない。タイレルの原文書が、その一片の樹脂の中で読めるアーカイブとし

て保存されているわけでもなかった。収められているのは制限付きの起動情報群――署名、古い鍵、ハードウェア ID、そして別に暗号化された記録群を治具が認証するための手順だった。

誰でもカードの写真を撮れる。誰でも盗むことはできる。だが、いずれの行為も、肝心の認証交換を成立させはしない。

エイドリアンは未開封の請願書を裏返した。STEPWELL の印があった。厳密には、今では STEPWELL と名乗り、水の契約を土台に築かれた都市の下で、古い商業上の義務を継承した機関の印だ。彼自身は PUDU-α を訪れたことがない。父の弁護士たちは訪れていた。その弁護士たちも姿を消した後は、運び屋が書類を手渡しに来て、名前は記録しないでほしいと頼んだ。

骨製のナイフで封を切った。

書類は二つの治具のどちらについても所有権を要求していなかった。要求していたのは、治具がいまなお存在するという確認と、生存する請願者が自分の名のもとで行われる行為を拒絶する機会だった。

エイドリアンは二度読んだ。それから、証人の拇印の下の一行を読んだ。

ORIGINATING IDENTITY: N6MAA10816.

手は震えなかった。それは勇気ではなく機械の成果だった。震えを伝える神経の大部分を交換していたのだ。父ならそれを改良と呼び、続けて交換部分の稼働期間を制限する条件を書き加えただろう。

その古い識別情報は死んでいるはずだった。父がただ一つ、「質問することを覚えた失敗作」と語った識別情報だった。

書類を閉じ、紋章のない二台目の装置に目を向けた。

「何体必要だったんだ」

誰もいない部屋に問いかけた。

「いったい、いくつの身体が」

＊　＊　＊

PUDU-α では、宙に吊られた貯水槽の天蓋を抜けて朝の雨が降っていた。ナディラは一軒の女主人から茶を買っていた。店の価格表は紙の帳簿、在庫管理は非認可の予測モデルの中にあった。帳簿は監査官のため。モデルは生き残るため。

ロイはテーブルの上の天蓋に貼りついた監視昆虫を眺めていた。親指の第一関節より短い。外殻は雨水回収器の周辺に溜まる灰黒色の残滓に似せてあった。風による不規則な揺れの下で、動作が一定の数列を反復している。昆虫ではないと分かった。

「政府のものか？」

「あなたが教えてよ」とナディラ。「私に聞こえないものまで聞こえるんでしょ」

「公開された送信機はない」

「なら誰のものでもあり得る」

ロイはその答えが嫌いになり始めていた。送信機がないことと、所有者がいないことは違う。国家は私企業に賃貸された装置の中へ国家所有物を隠すことを覚え、私企業は国家装備を模倣することを覚え、非公式地区はその両方の偽装を売ることを覚えた。「政府」は法的権威の体系を指す言葉で、機械を実際に操作する手を指すわけではない。

昆虫をそのままにしておいた。壊せば、認識したと証明してしまう。放置することで観測を双方向の取り決めにする。内部の出力予備量は夜の間に回復していた。しかし加速能力を支配する量は戻っていない。この区別はいまや、事実が判決文に変わった後のような重みを持っていた。

「私なしでも行けるわ」とナディラが言った。

「契約を知っているのはお前だ」

「受領証は持ってるでしょ」

「受領証は何かが起きた証明だ。次に誰かが何をするつもりかは書いていない」

満足げではない笑みが浮かんだ。「この街から間違った教訓ばかり学んでる」

「正しい教訓は？」

「最短経路が、その線を引いた人のものだと思わないこと」

下の歩廊に運び屋が現れた。その地区には高価すぎる服を着て、わざと目立たないふりをしていた。手首の装置は徹底的に無効化され、画面には起動ロゴの残像だけが焼きついていた。紐で蓋を結んだ細いボール紙の筒を持っている。

運び屋は二人のテーブルには近づかなかった。水を一杯買い、レジの脇に筒を置き、手をつけない水を残して去った。

店主がカウンターを拭き始めるまでナディラは待った。それから歩廊を渡り、工業用テナントの水料金を尋ね、袖の中に筒を隠して戻った。

中には感熱紙の帯が入っていた。一行目は、ロイが古い技術マニュアルで見覚えのある字体で印字されていた。マニュアルを読んだ記憶があるからではない。新たに獲得した彼の一部分が、その文字の形を保存していたからだ。

PETITION RECEIVED. PERSONAL APPEARANCE NOT ADVISED.
請願受領。本人の出頭は推奨しない。

その下にもう一行。

NO REMOTE INITIALIZATION WILL BE OFFERED.
遠隔初期化には応じない。

ロイは二本の指で紙をつまんだ。「答えになっていない」

「立派な答えよ。端末の向こうに人間がいると約束されたぐらいで、保管者はネットワークへ機械を送り込まない、ということ」

「所在地を尋ねた」

「話す方法を尋ねたのよ。場所を知るのとは別の願い」

裏面にはインクを使わず三行目が押し込まれていた。紙を傾ける。場所が示されていた。ただし座標ではない。水の配送予定、古い貨物等級、自然の潮汐を失った港の潮位計算。帳簿の改竄方法を知る会計士なら、そこから所在地を再構成できる。

数字を見てナディラの表情が変わった。

「この航路、存在しない」

「以前はあった」

「水利組合より前。地区の半分に名前すらなかった頃よ。二十年は誰もここで荷を運んでいない」

「訪問者を送るには変わった方法だ」

「あるいは、誰も探しに来ない場所へ正確に送り込む方法ね」

天蓋の上で監視昆虫が脚を畳んだ。飛び立つため、空気圧がごくわずかに変化する。ロイは手を卓上に置いたままにした。飛行方向を見れば、どちらを優先するよう命じられたか分かる。煙草のフィルターに収まるような機械に、貴重な循環液を使うつもりはなかった。

昆虫は浮き上がり、雨へ消えた。

省庁のアップリンク塔とは逆の方向へ。

河の方へ。

＊　＊　＊

六分後、同じ経路が川村室長に示された。報告書は、事務官が役立てられるような名前をすべて削ぎ落としてあった。

川村は観測方法を尋ねなかった。執務室へ入ってきた分析官は、機材より先に結果を説明するよう訓練されている。端末の座標は PUDU-α の下にある旧河川配分区域を指していた。隣には中央登録簿への照会を一度も行っていないと明記されている。報告の由来そのものが、物理的に記録されていなかった。

「自治区の中へセンサーを入れたな」と川村。

「民間管理の屋根を観測する権利を借りました」

「質問への答えではない」

「はい、室長」

渡された画像を紙に変換したものを調べた。出力した機械からは、省庁のパターン認識系へのアクセスが意図的に剥奪されていた。輪郭は描ける。関連づけを勝手に提案することはできない。川村には精密さよりこちらの方が価値があった。

画像の中心には、百年前の企業災厄の記録に現れた顔を持つ、淡い髪の男が立っている。横の女は細く白いものを片手に持っていた。男はカメラではなく、カメラが去った場所を見上げている。

「気づいている」と川村。

「何を知っているかは断定できません」

「観測されたと気づいたんだ。そこを混同するな」

写真が省庁の中央情報アーカイブへ複写されるのを禁じる指示書に、彼は略署した。中央システムは有能な使用人だった。普通の市民権の境界を予測するだけのデータが与えられている限りは。しかし新型の越境学習アーキテクチャは、矛盾する証拠を抑圧せず、整合させるよう設計されている。「六年寿命調和計画」は批判には耐えられる。だが、標準化された失効期間の背後にある生物学的前提が暫定的なものだと、行政 AI が無許可で発見した場合には耐えられない。

レイチェルが無期限延命を完成させた証拠は、まだ存在しない。研究を続けている証拠ならあった。省庁が押し込めた産業登録の枠からはみ出す機械の系列も確認されていた。上層部が公開を決断すれば、関連するハードウェアの大部分は再現できるだろう。残された部分まで再現できるかどうかは、「再現成功」を誰が定義するかにかかっていた。

「保管者は？」

「住所不明です。請願は非ネットワーク経路で送達されたようです。旧持株会社は遺産分割までタイレル家の名前を使っていました」

「死んだ企業より家族の方が監査しやすい」

「この家族は違います」

分析官を下がらせ、彼女に見せなかった紙のファイルを開いた。後にレイチェルとして登録された女が姿を消す以前、委託された研究業務の請求書が収められていた。手書きの注記は彼女のものだった。照合ソフトを使わなくても、無駄のない筆の運びを認識できた。助成金申請の余白に、一度こう記している。

LIFE SPAN IS AN ADMINISTRATIVE MEASUREMENT UNTIL SOMEBODY LEARNS TO CHANGE IT.
誰かが変更する方法を覚えるまでは、寿命とは行政上の測定値にすぎない。

承認したのは川村だった。

善意ではない。政治的影響など遠い未来の話に思えた技術への投資だった。

いま彼には、その文章が自分に宛てられた警告として読めた。当時の彼女には、いつか自分が「六年」を普遍化する部署を率いるなど、知る由もなかったはずなのに。

机上の無音の電話機へ手を伸ばす。省庁回線でかけられる相手もいた。だが、この番号は紙に印刷されていた。

部屋のアシスタントを起動せずにダイヤルを回した。

＊　＊　＊

エイドリアン・タイレルは三度目の呼び出し音まで待って受話した。以前の政府請負業者が私設回線につけていった電子音声フィルターは取り外してある。普通の会話を匿名にするための装置だったが、エイドリアンの調査では、かえって請負業者の記録精度を高めるだけだった。

「おはようございます」と川村。

「そちらの街の朝と、私の部屋の朝は同じ時間には存在しませんよ」とエイドリアン。

「請願書が届きましたね」

「私の請願ではない」

「治具を保管している」

「私が保管しているのは二つの遺物です。その違いは法律で確定しています」

「法的な用語を争うつもりはない」

「なら相手の家を間違えましたね」

意図的に長い沈黙が落ちた。エイドリアンは以前にもこの声を聞いている。タイレル研究資産の分解処分をめぐる手続審問のときだ。当時の川村は若かったが、沈黙の長さはまったく同じだった。空白を相手の言葉で埋めさせるために使うのだ。

「非認可の初期化を防ぎたいのです」と川村。

「私もだ」

「なら目的は一致するかもしれない」

「何が非認可かは、許可する権利を誰が所有するかによります。父は生涯、その問いを生命の発明と混同していました」

「何があなたの方へ向かっているか、ご存じですね」

「申請が提出されたことなら知っている」

「政府が分類できない構造を持つ、Nexus 系戦闘生物です」

「分類とは書類を提出する者の約束事でしょう」

「極めて危険な個体です」

エイドリアンは通電していない二つの治具を見た。父は一緒に保管せよと言い残した。彼は七年間その命令に背いた。しかし最後に分かったのは、分離しても欲しがる人間たちには何の違いもないということだった。

「危険なら、なぜ回収部隊を送らずに電話するのです？」

「秩序ある移管を希望しているからです」

「秩序ある没収のことですね」

「すべての関係者から装置を守れる立場ではないでしょう」

「私が何を守っているのか、あなたは取り違えている」

別れの挨拶もなく電話が切れた。

エイドリアンはその後の静けさの中でじっと座っていた。川村が探索を続けることは分かっている。そして室長が一度もレイチェルの名を口にしなかったことも、その脅迫より雄弁だった。

傷のある紋章がついた保管庫に近づいた。最下段の引き出しには二つの治具の折り畳まれた図面が入っていた。技師の署名は紙から注意深く切り取られている。図面の間には、元の手順に対する訂正が書き加えられていた。

CACHE RESTORATION IS NOT CONTINUITY RESTORATION.
キャッシュの復元は存在の継続の復元ではない。

その下、父の筆跡で第二の注記。

DO NOT ALLOW THE STATE TO COLLAPSE THESE INTO ONE OPERATION.
国家に、この二つを一つの処理へ統合させてはならない。

エイドリアンにはそれが倫理原則なのか工学的な警告なのか、ずっと分からなかった。装置を相続した少年は、両者は切り離せると思っていた。年老いた今は、そうは信じていない。

鍵のかかった引き出しから二通目の封筒を取り出した。無地で、バネ式クリップだけで閉じられていた。中の紙はタイレル社崩壊後の研究施設輸送目録だった。東南アジアの古い水利権区を横断した研究保管官の項目がある。積荷は大気凝縮装置用のバルブ一式。

余白の筆跡もまた、レイチェルのものだった。

A WATER COMPANY IS AN EXCELLENT PLACE TO HIDE ANYTHING THAT MUST KEEP FLOWING.
流れ続けなければならないものを隠すには、水の会社ほど適した場所はない。

それが告白なのか、冗談なのか、罠なのか、エイドリアンには分からない。装置を守ってきた年月は、単純な区別を疑うには十分だった。

請願者の受領証を取り、手書きで返事を書いた。

DO NOT BRING YOUR BODY TO THE FIXTURES. BRING THE QUESTION YOUR BODY CANNOT ANSWER.
その身体を治具へ持って来るな。身体には答えられない問いを持って来い。

両方の装置を施錠し、デジタル旅券を一度も携行したことがない運び屋を呼び出した。

＊　＊　＊

日暮れの後、ロイとナディラはかつての貨物水路へたどり着いた。待ち合わせ場所らしいものは何もない。コンクリートの擁壁に囲まれた細い黒い水路。上の建物は何度も改造され、元の建築はケーブルや排水管を据えつけられなかった空隙にしか残っていなかった。橋の下には錆びた名称標識が逆さまにぶら下がっていた。その裏に新しい名がアラビア文字で書かれている。

ナディラは訳した。「勘定が清算される場所」

「正式名称か？」

「誰が支払うかによるわ」

雨の中へ温かい排気を吐く換気ダクトの下で待った。ロイは水面を見つめていた。見えない橋の向こうを通る船の振動を数え、保守ドローンと荷運びの小舟のプロペラ音を聞き分け、ナディラには見えないほど弱い反射から壁の向こうの動きを描ける。それでも自分に何年残されているかだけは分からなかった。

「保管者なら答えを知っていると思う？」と彼女。

「誰が俺を作ったか、知っているかもしれない」

「知らなかったら？」

「その人が知っていることを聞く」

「失った年月は？」

ロイは、雨を表面に薄く載せて南へ流れる河を見た。「もう存在しない身体のものだ。いま存在していると知るのに、その記憶は必要ない」

ナディラは意外に思った。男は、完全な経験の目録がなければ存在の連続性を失うとでもいうように、失われた歳月に執着するものだと思っていた。だが彼は、空白を作業仮説に変えていた。諦念ではない。工学だった。

遠い橋の下から航海灯を消した荷役用の小舟が現れた。操縦者は透明なフードをかぶり、武器を持っていない。船首に小さな封筒が置かれていた。岸へ寄り、コンクリートに触れ、封筒だけを水面より上の乾いた棚へ滑らせる。それから去った。

ロイは水へ踏み込むことなく封筒を取った。中には手書きの一行。

DO NOT BRING YOUR BODY TO THE FIXTURES. BRING THE QUESTION YOUR BODY CANNOT ANSWER.
その身体を治具へ持って来るな。身体には答えられない問いを持って来い。

署名も住所もなかった。保管者自身が書いた保証さえない。

「どういう意味？」とナディラ。

ロイは元からついていた折り目で紙を畳んだ。目覚めて以来初めて、問題は古い機械を見つけて、あと何年生きられるかという数字を言わせるだけではないと理解した。古い機械は複製を認証し、システムを再起動し、身体の存在を証明できるかもしれない。しかし、そのどれもが、なぜその身体が作られたのかを説明するとは限らない。

「俺を再起動できることは、知っているという意味だ」

「それで？」

「それが生きていることと同じなのかは、あいつにも分からない」

頭上で屋根のセンサーが低く唸り始めた。ロイは気象制御ではなく捜索パターンだと認識した。水路の奥へ三つの物体が風に逆らって入ってくる。省庁の紋章も、目に見える武器もない。その沈黙は軍用設計のものだった。

ナディラは彼が顔を向けたのを見た。「何機？」

「三機」

「止められる？」

ロイは通常の筋肉の奥で待機する出力を感じた。使えば減り、後で再び回復する能力。その可逆的な予備量の下には、戻らない媒体がある。この狭い水路なら三機を迎え撃てる。おそらくすべて破壊できる。だが勝利の代価は、機械たちが消えた後も彼の身体が支払い続ける。

「できる」

ナディラの手を取り、水面より下の開口部へ導いた。古い保守用通路が河床の下を通っている。戦闘レイヤーは起動しなかった。

「だが、俺はそのためにここへ来たんじゃない」

三機は二人がいた場所を通り過ぎた。センサーが見つけたのは雨、温かなコンクリート、乱れた水面、そして追うべき有効な識別情報の欠如だけだった。

遠く離れた、通電していない二つの治具のある部屋で、エイドリアン・タイレルは父の最後の技術ノートを開いた。そして第11世代の身体について記されたすべてのページで、一つの単語が線で消されているのを見つけた。

LIFEではなかった。

DEATHでもなかった。

CONSENT――同意、だった。